

特定非営利活動法人 山科醍醐こどものひろば

子どもの貧困対策事業レポート (2010年～2021年)



発行：2022年11月
特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば
〒607－8072
京都市山科区音羽伊勢宿町33-77
Tel：075-591-0877
Mail：kodohiro@gmail.com



＜はじめに＞

理事長からのあいさつ	1
子どもの貧困対策事業の概要	2

＜12年間でふりかえる＞

数字とふりかえる	4
子どもとサポーターとふりかえる	6
地域の方とふりかえる	8
活動担当者とふりかえる	10
社会とふりかえる	14

＜おわりに＞

事業担当者よりあいさつ	17
-------------	----



「活動スタートから12年。

子どものよりよい豊かな育ちの環境づくりをこれからもともに。」

山科醍醐こどものひろばが、こども生活支援センターを設置し、子どもの貧困対策に取り組み出した2010年。当時は「子どもの貧困」という言葉も珍しく、地域で活動していく上では、その問題についての理解はもちろんのこと、ともに同じ地域で暮らす子どもの現状を理解していくところから活動ははじまりました。団体としても当時設立から30年の月日が流れてはいましたが、この活動をスタートすることでこれまでの活動では繋がることのなかった子どもや家庭と出会い、関わることになりました。子どもを取り巻く社会問題として、虐待、いじめ、貧困、今ではヤングケアラーといったものが注目を集めますが、実際に地域で暮らす子どもたちは社会問題で分かれているわけではありません。さまざまな状態・状況というだけであり、あくまで地域に暮らすひとりの子どもです。だからこそ子どもの貧困対策として取り組んではいますが、大事にしたのは出会った子どもや家庭の今に応えることから始めることであり、その結果見えてくるこれまでの社会にある問題点や制度の不十分な部分への改善・提案を行うことを続けてきました。

今では、多くの連携先が子どもたちの育ちの環境づくりのために協力をし、毎日のように活動を行うことができています。また特定の世帯構成や年齢、また社会問題を対象とする各行政の委託や補助事業、民間助成金では対応できない子どもたちへは多くの寄付金によって活動を届けることができました。この12年間で支えてくださりありがとうございました。またこの2年間はコロナの影響もあり、従来の活動とあわせて食料支援（配布）も増えました。問い合わせの状況をみても、この12年間でさらにこれまでつながっていなかった子どもと繋がりが拡大していることから貧困改善には程遠いと感じています。対策より目の前の対処すらままならないのが実情です。この12年間で法律もでき各地域でも子どもの貧困対策計画や子どもに関わる事業が立ち上がっていますが、社会制度としては子どもたちの環境を豊かにできるには未だ不十分な状況ではあります。また制度ができただけでは解決しないことも多々あります。さまざまな背景が重なり合い、複雑にこじれた貧困の背景を解すには何年もの時間もかかります。これからも地域のなかでじっくりと関わり続け、子どもたちとともによりよい豊かな育ちの環境を作っていければと思っています。

今回はコロナ禍の2年間でこれまでの12年間で少し振り返った報告書となりました。さまざまな方からメッセージを寄せていただきました。多くのつながりに感謝と、これからさらに多くの活動を届けていきますので、引き続き応援いただけますと幸いです。



2022年11月
特定非営利活動法人 山科醍醐こどものひろば
理事長 村井 琢哉

子どもの貧困対策事業について

地域の子どもの豊かな育ちを応援する中で、集団で過ごすことが苦手だったり、学校に行くことが出来ていないという子どもや家庭の声から、2005年より個別サポート事業「楽習サポートのびのび」という活動がうまれました。この活動が続けていく中で、経済的困窮を理由に体験活動への参加費が払えないなどの声も聞こえ始め、経済的困窮を理由とした子どもたちの困ったを解決するための事業として2010年に「子どもの貧困対策事業」をスタートさせました。

現在では「暮らし・学習・余暇」という3つのサポート活動を軸に、一人ひとりの子どもの「やってみたい」に合わせた形で活動しています。

主な活動拠点として「山科事務所・こども生活支援センター」「醍醐事務所」「ふれあいカフェ♡トトハウス」の3拠点が 있습니다。その他にも食材配布、地域連携として、区役所や山科青少年活動センター、保育所、学校も共同で活動しています。

暮らしサポート

平日の17時～21時に、遊び、夕食、入浴など日常的な夜の生活をサポーターと一緒に過ごす活動です。子どもの生活に合わせて日中に実施することもあります。年に数回の宿泊活動もあります。

また拠点へ来られない不登校、ひきこもりの子どもに対しては3ウトリ一活動として家庭訪問を行なっています。



学習サポート

平日の90分間、サポーターと一緒にマンツーマンで勉強する活動です。

ちょっとしたわからないことも気軽に聞けて、自分にあった勉強の仕方を考えたりもします。



余暇サポート

土日を中心に、スポーツや体験活動、地域イベントに参加して休日を過ごす活動です。

地域のいろいろな人の力をお借りして、普段の生活や活動ではできないことにサポーターと一緒にチャレンジしています。



大人になっていく子どもたち

「楽習サポートのびのび」から始まった「子どもの貧困対策事業」も2022年で12年を迎える。もともと「集団は苦手」という声から始まり、子どもたちの「やりたい」にあわせてマンツーマンで作られる活動の時間。1週間に1度、2時間くらいの時間だけれども、活動が始まった当時の子どもたちはもう20歳を超える大人になり、今でも活動を支えるサポーターとして関わってくださる人もいれば、同窓会で顔を出してくれる人もいます。

季節の節目、誕生日、夏休み、冬休みはいつもの日常の活動からちょっと特別な時間になる。短冊に願いを書いたり、花火を楽しんだり、ケーキをきれいに切り分けられるかどきどきしたり。でも思い出を話してみれば、実は特別なことをしたことよりも、日常と一緒に時間を過ごしてきたサポーターとの思い出話が多くて、「あの時、〇〇ってめっちゃ

料理失敗してたよな」みたいな、あの時恥ずかしくて話せなかった気持ちも出てきたりする。何をしたかも大事だけれども、それ以上にそばにいてくれた「誰か」が大事な活動なんだとはっとさせられる。

この活動が始まってから、12年間、ずっと同じ場所で同じ時間帯に活動が行われたりする。年始にはそのまま手書きの年賀状を入れてくれたり、ふらっと活動の時間にバイト帰りの卒業生が休みに現れたり、「ちょっと勉強やばいから行っていい？」と電話してきてくれたりと、来る理由も人それぞれ。「のびのび」という名前のおかゆだなと感じるのは、ただここが勉強をするだけの場でもなく、困った時に何かを解決するだけの場でもなく、休むことも頑張ることも、わくわくすることものんびりすることも、いろんなことが混ざってできる場所だからなのかな…。

～12年間を **数字** とふりかえる～

子どもの貧困対策事業のこれまでの実績

	寄付金額	寄付者数
2020年度	2,023,234 円	106 人
2021年度	1,312,500 円	76 人
2010年～ 2021年まで	17,093,106 円	1162 人

(社福) 京都市伏見区 社会福祉協議会	(社福) 京都市 社会福祉協議会	生活協同組合 生活クラブ 京都エル・コープ	京セラ株式会社	(株) 王将フードサービス	こども食堂 サポートセンター (一社) 全国食支援活動協力会
認定NPO法人 おてらおやつクラブ (寺院など6団体)	コスモス ニューヨークコーヒー	合同会社 10decades	有限会社 オー・エス・エス	(株)京都繊維	JAMMIN合同会社
その他 会員や個人の方からも 多くの支援をいただきました	この2年間に食材、物品等の支援をいただいた団体				

私たちの経験を社会へ

年間 約 **100** 件



～主な研修のテーマ～

- ・居場所づくりのノウハウ提供
- ・支援者のネットワークづくりの研修
- ・子どもの貧困、子どもの権利をテーマにした研修
- ・近年の子どもを取り巻く環境についての情報提供
- ・子どものケース会議
- ・専門職の研修を企画、立案
- ・中高生と子どもの貧困について学ぶ授業
- ・研究、視察の受入れ

～社会へのアプローチとして～

1. 情報提供
2. 子どもへ支援や居場所活動の相談
3. 研修の場でのコーディネート
4. 企画立案（連続講座、研修依頼）
5. 現場での受入れ（実習、インターン、調査）

～対象～

地域住民、専門職、教育、行政、企業、高校、専門学校、大学への授業など

活動回数

2020年度 **336** 回

2021年度 **325** 回

登録者数

2010年～
2021年まで **129** 人

食材支援数

2021年度 **422** 家庭

6,896 食

(主食のみ計算)

活動参加者数

260 人

291 人



保護者からのメッセージ

食材支援をしてもらい、大変ありがたいです。うちの場合はですが、教育費用の割合が大きいんです。子どもも年齢が高いので家計のことは分かっていて、お風呂を早く上げたり100円使うにも気を使ったりと一緒に節約の日々を送っています。

それでも子どもからは「(僕が) 今勉強を頑張っているのは、将来就きたい職業があった時に学力の問題で諦めたくない。なんとか選択肢を広げたい」と言っています。

子どもは「僕がいきたい学校に行ったせいで…」と言っていますが、子どもの夢は応援してあげたいし親子で頑張りたいと思っています。

親としては子どもに「諦めない人生を送ってほしい。諦めない人になってほしい」と思って頑張っています。

私はあまり勉強ができないので、子どもの勉強をみてあげることはできません。中学生

になった時は、塾にもいけなくて勉強もつかなかったことで意欲が下がってしまっていました。そこでこどものひろばに中三学習会を紹介され、行ってみたら本人は教えてもらえることが嬉しくて今では一生懸命頑張っています。少ないチャンスを逃さないように頑張っています。こういった支援が増えていったらいいのと思っています。

(中学2年生保護者)



子どもたちとサポーターの声

活動を卒業した子どもたち3人に当時の活動についてフリートークしてもらいました。その中でも印象的な言葉を書き出しました。つかった日も今となってはいい思い出。

活動はおはあちゃん家に行っている感覚で、毎週ここにくるのが楽しみだった。

中学3年生になってからは特に「もうすぐ木曜日だ」と思って、早く行きたいとなっていた。参加者が自分1人のときも楽しみにしていたけど、他の参加者とちょっと仲良くなって、しゃべるようになってきたらより楽しいと思うようになった。学校休んでも、活動にはきた。サポーターはお姉ちゃんって感じだった。私は兄弟の中で1番上で、お姉ちゃんって感じの人がいないから、サポーターがお姉ちゃんみたいでめっちゃうれしかった。

学校とここではキャラが違って、ここではほんまに本気の素を出せる場所だった。

だから、あんまり活動が楽しいってことも、前面に今まで言葉に出したことがなかったけど、活動を卒業するときに、いろいろ想いを語ったことがなんかすごい心に残ってる。



うぽろさん

活動は生活の一部。手を洗うとか、顔を洗うみたいに。当たり前の感覚。木曜終わったわと思ったら、また木曜来たわっていう感じ。活動に行きたくない日はなかった。

活動をやっていて良かったのは、人にやってもらうんじゃなくて、自分でやるっていうこと。自分でピザ作るとか、自分で勉強するとか。教えてもらいながらだけ。

サポーターは家族みたいだった。お兄ちゃん、お姉ちゃんに教えてもらっている感覚。お母さんとかだったら反抗して「そんなんわかってるし」みたいに言ってしまう。サポーターやったら「どこがわからんの？」から始まるけど、母親の場合やったら一から教えてくんねん。「そっから教えんでもいいねん」とかも言って反抗しちゃうけど、お兄ちゃんお姉ちゃんに教えてもらってるっていう感覚があるからすんなり勉強できた。ほんまに家族みたいな…。兄弟感覚。

受験が終わると、活動ももう終わりがみたいな感じになって、ちょっとはやいなーみたいな。最後の方は活動もう無いのか？みたいな。もうあと5回かーって思ってた。



グローさん

一度も活動に行きたくない日はなかった。本当になかった。なんかずっと楽しいめっちゃ好きな授業を受けている感じがしてた。活動で友達もできたし。

活動で印象に残ってるのは、何気に掃除。学校の掃除とは違って面白かった。学校の掃除はなんかだるいが勝つけど、活動の掃除は面白かった。他にも正月にやった餅パーティーも楽しかった。初めて正月がこんなに楽しいと思った。お年玉以外でこんなたのしいことはなかった。クリスマスとかハロウィンとかは、あんまりやったことはないけどコスプレするみたいな楽しみかたもあるけど正月ってお年玉かせちぐらいしか楽しいことないやん。

楽しくて、活動のある木曜日が来るのが早いと思った。活動が時々休みになると悲しくなった。この活動は1週間に1回の楽しみになってた。



さくらさん

わたしの活動 4年間の関わりを通して



になりん
サポーターとして大学
4年間、こどものひろ
ばの活動に関わる。

活動を通して自身の中で変化はありましたか？

初めは、「学習会なんだから勉強しないと」、「子どもから話を聞かないと」とか、とても堅苦しく考えていたなと思います。今の自分はずっと気楽で、子どもが来てくれて、一緒に楽しく過ごしてくれたらいいくらいに思えるようになりました。この3人とずっと活動してきた中で、子どもから元気をもったり、自分にとっても学習会が安心できる場所になっていたり、子どもたちに与えるよりも与えられることの方がとっても多いことに気づいて、「学習会」とか、「学習支援」じゃなくて、「人」と「人」としてもっと純粋にかかわりたいと思えたことが影響しているんじゃないかなと思います。



活動で作った
思い出のまずい料理

どんな想いで活動に参加していましたか？

様々なサポーターとの出会いを通して、楽しいことも、難しいことも、成功も失敗も、いろいろなことを楽しめる人になってほしい、そんな想いです。子どもたちも、学校や部活、家族がちょっと嫌になったり、将来が見えなくなったり、中学3年間うまくいくことはわかりではないけれど、そんな姿も含めて、寄り添い、一緒に向き合っていきたいと思っていました。

参加していた子どもたちとどんな時間を過ごしてきましたか？

普段の活動では、サポーター手作りの『気まぐれプリント』で勉強をしたあと、ホットサンドを食べながらボードゲームに勤しむことが多かったです。勉強の時間は大人も子どもも一緒に気まぐれプリントを解くのですが、誰が早くできるか競争したり、わからないところは全員で協力して解いたり、真剣に、でも楽しく取り組んでいました。ゲームの時間は、みんなのお楽しみで、帰る時間も忘れてしまうくらい全力でした。

節目節目の季節では、子どもたちとパーティーを企画しました。個人的に、印象に残っているのは、2年目のハロウィンにやったパンケーキパーティーです。みんなで作って、トッピングしたのですが、子どもの一人がホイップクリームとミカンにケチャップをかけて、まあまずそうなものを作ります。結局みんな巻き込まれて、一緒に食べることに…。食べたら本当にまずかったのですが、自分も子どもたちの仲間として認めてもらえたような気がして、いまでも心に残っている時間です。

になりんからみて、学習会とは？

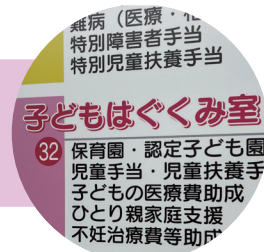
「無理におとなにならなくていい場」です。中学生になって世の中を知っていくうちに、周囲に変に気を遣ってしまったり、大人に憧れたり、反抗したり、大人になっていく瞬間がたくさんあると思います。サポーターだって、子どもの前で大人ぶってしまうこともあります。でもそんなことすら意識する間もなく、みんなと一緒に勉強したり、本気でゲーム対決したり、いたずらしたり、等身大の自分たちで過ごせる、そんな場所でした。

卒業式で子どもが「家族みたいな場所」と言ってくれたように、子どもたちにとっても、ありのままの自分で、安心して過ごせる場所になっていたのだとしたらすごくうれしいです。

～12年間を 地域の方 とふりかえる～

協力いただいている 地域の皆様の声

区役所子ども関係部署 担当者より



私たちがこの地域の区役所で子育て支援業務を行っていく中で関わるご家庭の傾向としては、経済的困窮や心身の障害、複雑な家族構成等を背景に不適切な養育環境で育つ子どもが多いことが挙げられます。

虐待や貧困状態がありながらも、すべてが家庭内で完結しており、課題が見えにくく、必要な支援が入らないこともあり、「負の連鎖」が起きる可能性が高いです。

不安定な家庭環境で暮らす子どもたちが、子どもの居場所など地域で安心して過ごせる場所や頼れる大人の存在を知り繋がっていくことはとても大切なことです。

このような状況から、現在力を入れていきたい取組としては、「思春期」という心身共

日頃、活動でお世話になっている地域のカフェ・小学校の校長先生・区役所の担当の方から、地域の子どもの現状やこどものひろばの活動の様子、現在の取り組みを語っていただきました。

区役所で子育て支援担当として業務を行い、当事業の参加者の家庭状況の共有を行なうほか、地域の子どもの居場所や学習会などを連携して行なっています。

に大きく成長する時期に、自身の生きる力をつけるための思春期教育を地域の小中学校と連携して行なっていくことです。この取り組みを通して、思春期の子どもたちに正しい知識を身に付け、自分や人を守ることができる場所がある、ということも学んでもらい「負の連鎖」を断ち切るきっかけになればと考えています。

区役所ではどうしても制度の限界がありますが、山科醍醐こどものひろばさんは地域で暮らす子どもたちの居場所となってくださっており、大変心強い存在です。今後も共に協力して子どもたちを育み、取組を進めていければと思います。

毎週こどものひろばでは、カフェの閉店後の時間を活用して中学生向けの学習支援活動をしてきました。学習会では店主という立場で子どもたちからはお母さんのように慕われています。

ーターさんの姿を見ることで子どもたちは将来、数字やお金や地位のためではない違う視点で社会を見ることができるようになっているのではないかと思います。

実際学習会を卒業していった子どもたちが、あるときふとカフェに帰ってきて「お世話になりました」と感謝を述べてくれた子もいて「本当に立派に育ったなあ」と関心しています。

活動したらすぐに結果が出るというものではないけど、いつか子どもたちが「生きる力」を持ってくれると私は確信していますよ。これからも頑張ってください、応援しています。

学校運営協議会や土曜学習やイベント参加などで学校行事に関わらせていただきながら、学校で気になっているリスクの高い家庭の子どもたちを連携して受け入れてきました。

学校として関わる中で親が十分に社会生活に適応できていない中で働き子育てをしなければならず、様々な制度についての理解や知識を持ち得ていないので、学校からも発信し制度につないでいき、お家とともに寄り添って支えていく場面が非常に増えてきていると感じます。

そういった状況の子どもたちに対して「時間を増やしたらいい」「ただ勉強を教えたらいい」というわけではなくて、色々な体験・経験をベースにしながら確かな学力に高めていくための必要な非認知的能力をまずは育てていってやらないと授業やドリルなどで取り組んでいる学力が積み上がり定着していきません。



小学校校長先生より

そういった意味では学校と一緒にわくわくスクール（月一土曜学習）や宿泊学習等で子どもたちに関わっていただける山科醍醐こどものひろばの若いスタッフの皆さんの力はよいモデルとして大変良い影響を与えてくれていると感じています。

将来は子どもたちが学校・地域で培われた力がこの地域に残り、立派な社会人となって次の世代の親になったとき培われたモデルと教育がその下の世代に受け継がれ、次の世代として学校に入学していくというサイクルが2代3代と続いていけばこの地域全体としても変わっていけるだろうと思います。

連携先での活動の様子



会議室での卓球大会



カフェでの学習会風景



保育園でのごはんかい



区役所での学習会看板

カフェの店主より



いつも歳の近い大学生ら（サポーター）と子どもたちが勉強やゲームをして触れ合っている姿をカフェのお嬢ちゃんとしてほのぼの見させてもらっています。

サポーターさんや子どもたちのために手作りのプリントを作ったり一緒にやっていたり、一緒になってゲームしているのを見ると、（学力を上げるための）塾とは違って学力だけではない、人間らしいふれあいや繋がりの大切さを学んでいるなということを感じています。

子どもが生きていくには「協力する力」「社会で生きていく力」はとても大切です。ボランティアで懸命に子どもに向き合うサポ

～12年間を 活動担当者 とふりかえる～

私たちが 子どもたちと共に大切にしてきたこと

社会情勢が目まぐるしく変わっていった12年の間に活動は変化をしていきながら今日まで活動を続けてきました。

今回は、子どもとのマンツーマンの関わりを大切にしてきた学習サポートのびのびから始まった貧困対策事業。その立ち上げを知る梅原さん、その後引き継ぎ活動を広げていった津田さんに現在職員の福崎がインタビューしました。

二人から受け継いできた10年間の活動を振り返り、10年変わらない「マンツーマンでの関わりの中での大切にしてきたこと」を語りました。



インタビュー
福崎由貴子（ゆっこ）

2018年入職
つだから活動を受け継ぎ、現在学習サポートのびのび兼貧困対策事業担当。



梅原美野（うめちゃん）

2011年入職
学習サポートのびのびの立ち上げと貧困対策事業の立ち上げに関わる。現在ケースワーカー。

2015年入職
うめちゃんから活動を引き継ぎ、地域連携を大きく広げていった。現在小学校教諭。



津田大揮（つだ）

ひろばの職員であった時と今の立場を 経験されて、感じることはありますか？

① 当時は主に学習支援の参加者に対しては、居場所となる活動でありながらも、学力を上げなければいけないという、葛藤がありました。今思うと、子どもが活動に来て、親でも先生でもない、お兄さんお姉さんの存在のサポーターと関わることだけで、本当に貴重な場でした。私は現在、ひろばとは別の地域で福祉的課題のある家庭と関わっていますが、「ああ、ひろばのような活動があればな…」と何度頭をよぎったことが…。

② 学校の先生としてひろばのありがたさを感じるのは、保護者と関わる時です。やはりリスクを抱えた家庭と関わる時は、どうしても学校という立場だけで敵視されやすく家庭と関係が悪くなる時はあります。ひろばは学校と家庭の間に入ってクッション材となる時がありますが、僕が赴任しているところにもそういった人がいれると思います。

リスクを抱えた家庭で不登校である、学校では子どもの安全状況を確認できない時があります。ひろばが第三の居場所として子どもの生存確認（※安全状況の確認）ができるってありがたいなと思いますよ。

当時子どもたちと活動を作っていたいかながら工夫したところなんですか？

① 僕は地域と一緒に活動をする仲間を増やしたいなと思っていました。子ども食堂の流れもあり地域には子ども食堂がたくさん立ち上がった頃で、各所からひろばにはたくさんの子どもの相談や子ども食堂運営相談が来ていました。そしてたまたまひろばでは新しく学習会が立ち上がったタイミングでこれまでよりも大きな枠で受け入れることができました。

これまでよりも、子どもたちがひろば以

外の場所でおっちゃんとかおばあちゃんとか、なんか仲良くなってなにやない関係とか繋がりが作れたらいいなって思っていましたし、そのためには地域に子どもと関わる人をたくさん増やしたいなっていう方に重点的に動いてましたかね。



当時抱えていた葛藤はありますか？

① すばり、職員としての役割です。新卒で初めての職場であること、社会福祉士としての経験が浅いこと、職員のモデルがないこと（新卒で職員となるのは初であったため）、当時は本当に自信のない中でやっていた。職員だから、サポーターよりしっかりしないとイケない、活動は少し距離を置いて色々な視点で見なければならなかったといった、職員という肩書きに自分自身が縛られていたように思います。また、当時は「子どもの貧困」が広く知られたタイミングであり、ありがたいことにたくさんのサポーター登録がありました。サポーターが継続して活動に参加してもらえるような丁寧なフォローや、活動の運営のことを考えてもらうようなサポーター育成、課題と感じながらも十分に取組めなかったことも悔しく思っていました。

② うめちゃんから活動を引き継いだ時に、自分はどうやって活動を作ったらいいかわからず右往左往しました。

当時は、周りに迷惑かけたなと思ったし、うめちゃんのようにできないって葛藤もあったけど「うめちゃんの頃に来てる子どもたちも違うし、全く同じ活動を作るのは無理だな」と思いながら何とか振り切ったんですよね。ベテランのサポーターたちに教えてもらいながら、彼らがうめちゃんから活動を受け継いで回してくれた、そんな感じでした。

苦勞しすぎて当時の記憶がないくらいです…なかなか言語化できないですね。笑

活動をする時に、意識して大切にしていた言葉はありますか？

① うめちゃんの話でめっちゃ覚えてるのは、来ている子はもちろんやけど地域の中にはひろばの活動にこれない子もたくさんいるよっていう話を学生の時に聞いてなるほどと思いました。

実は活動（ひろばやそれ以外の子ども食堂など）に来られるっていう状況だけでもラッキーで、人と関わる機会自体をもてな

い、機会があっても生かすことができない子はいて、参加するにも厚い壁があるってことも認識しながら活動を作っていく必要があるっていうような話を聞きました。

実際に活動作ってもきてくれないこともあり、「どうやって来てくれるんやろう」みたいなのをやっぱり考えることが多かったです。

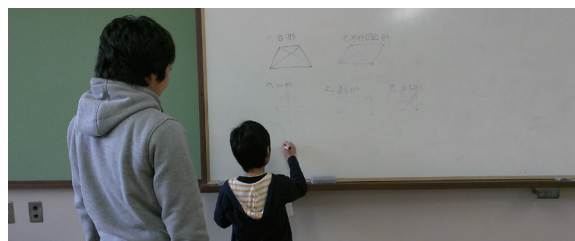
当時、どうやって活動を広げてきましたか？ また印象的なエピソードの話はありますか？

㊦ 子どもの貧困対策事業のスタートは、トワイライトステイ(生活支援)です。当初は、参加者集め、本当に必要な子ども達に活動を届けるためにはどうすればいいのかと頭を悩ませていました。そのような中で、私が元々関心のあった学習支援の活動を作ることになります。学習支援事業のキックオフイベントとして、500円で夏休みの宿題を一緒に取り組む「ワンコイン勉強会」を開催したのですが、予想以上の反響でした。参加者の親から、学習支援は「勉強」ということでイメージしやすい、生活支援は親がちゃんとしていないと思われぬ不安があるといった声があり、なるほどと感じたことを覚えています。学習支援に参加した子どもが生活支援の活動につながるということもありました。そのような中、「子どもの貧困対策事業」の取り組みを知った方からのつながりで、小学校連携

活動が始まります。学校で活動する中で、夏祭りやふれあいサロンといった地域イベントに参加する機会も増え、顔を少しずつ覚えてもらえるようになりました。当時の校長先生の言葉で、「win-winの関係になりましょう」という言葉が印象に残っています。必要な子どもたちに活動を届けたい、サポーターの活動の場を増やしたいといったこちらの思いと、先生の負担を減らしたい、できるだけ子どもたちには学校で過ごして欲しい、といった学校の思いがうまくマッチングした取り組みが始まったときには、本当にわくわくした気持ちになったことを覚えています。活動以外にもどうしたら応援してもらえる人を増やせるか、子どもの貧困について学んでもらう機会を作ってもらえるか、活動を継続するための仕組みづくりといったことも意識して、取り組んでいました。

貧困対策に限らずマンツーマンの活動としての のびのびの活動で、大切にしたいことはありますか？

㊦ 私が一番意識していたことは、子どもの隣に寄り添い続けることです。まったく言葉を発しなかったとしても、隣にいて「私はあなたを気にしているよ」とサインを送り続けていました。また、活動の中で見つけた良いところや素敵なお話、以前からの変化を言葉で伝えるようにしていました。「他でしんどいことがあっても、活動のこと思い出したら笑える。」子どもから言われたとても心に残っている言葉の一つで、それが居場所ということなのかもしれないと子どもに教えてもらった気がします。そうしてもらえよう日々頑張らなきゃとは思っていました。



㊦ 難しいですね、将来子どもたちの思い出になったらいいなと思ってました。それが別に何でもないご飯の時間のあるし、特別なこともいらなくて…日常生活やキャンプとかもそうですけど、なんかふとしたときに「楽しかったな」って、クスッと笑顔になれるし思い出があるから頑張れるみたいな、そういう場所にはなったらいいなと思っています。子どもたちが生きていく中でそれが思い出になってちょっと活力になってくれたらいいなという思いが何か(ここのみんなの)共通なのかなという、気づいております。



今後の活動に対してどんな思いがありますか？

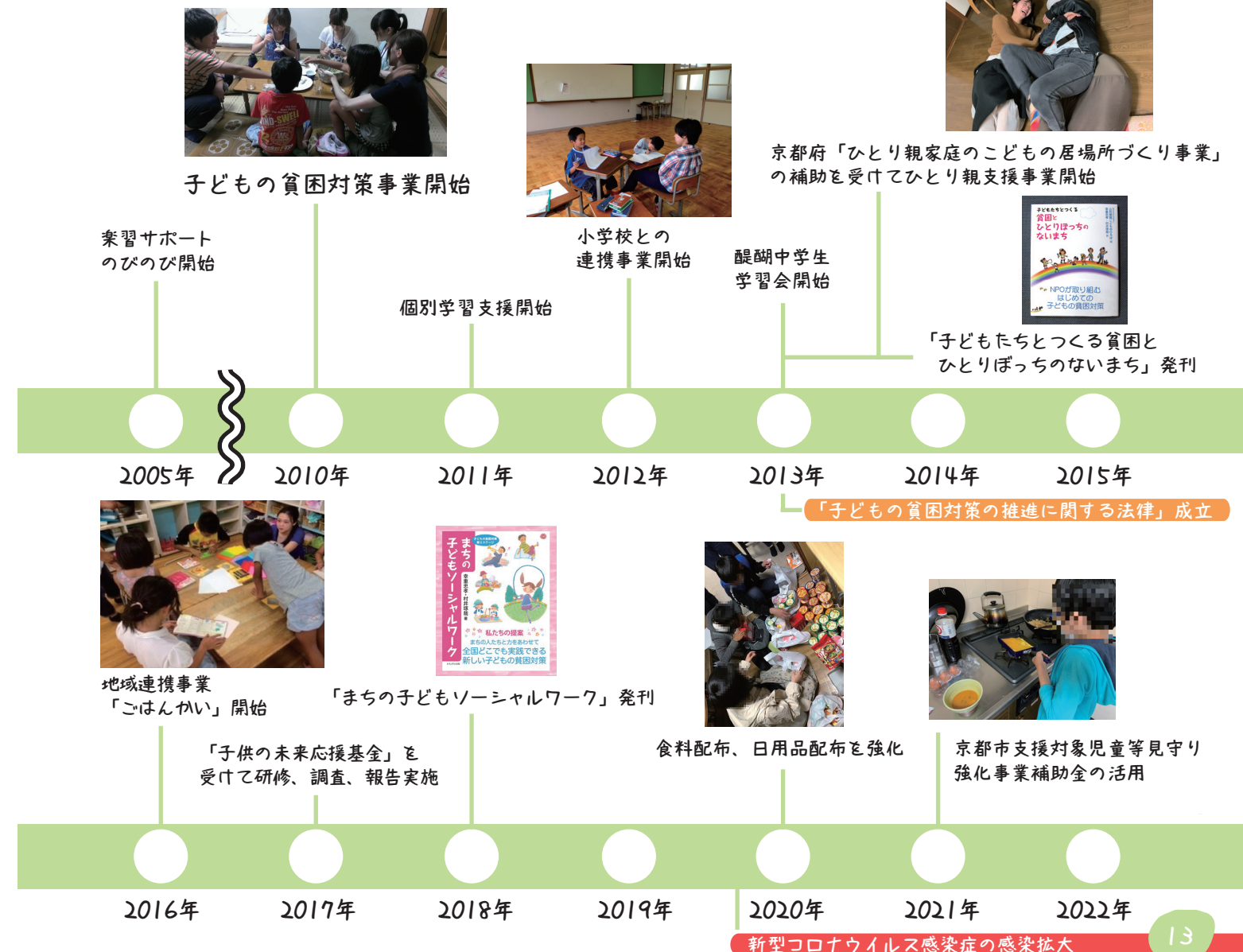
㊦ 私が退職後も後輩が引き継いでくれたおかげで、たくさん子どもたちに活動が届くようになりました。しかし、このままでもいいのかなという思いも少しあります。子どもの貧困対策事業として、どこまで関わっていくのか、一度整理が必要になっているのかなと思います。担い手をどう増やしていくのか、様々な活動を子ども自身が選択できるよう様々な団体と連携することがますます必要になっているように感じます。また、子どもたちは高校生になると基本的に卒業となりますが、次に働くというところでつまずく子どもたちも多く見てきました。現在の仕事でも、若者支援の資源の少なさに困っています。ひろばが取り組むのは置いておいて、就労支援のような社会に出ていくための準備のような場があると、いいなとは思っています。

㊦ 貧困対策事業だけではなく、何か他の活動に繋がったらいいなと思っています。キャンプとかもそうですけどひろばはいろんな選択肢をもっているし、自ら活動をえらんで参加して、活動でパワーを貯めていって次に繋ぐらいたらいいなと思っています。

㊦ 10年経って現在コロナ禍ということや長い間活動をやってきたことで、受けるご相談の内容が多様化し、これまでより多くの困難家庭のご相談を受けることが多くなり、福祉的な支援とのバランスが難しいなと思います。でも大切にしたいのは「いつでも子どもたちが心安らぐ場所を作ってちょっとでも楽しいことを一緒にしたいな」という気持ちはこれまでもこれからも忘れずに活動していきたいなと思っています。



京都府「ひとり親家庭のこどもの居場所づくり事業」の補助を受けてひとり親支援事業開始



これまでの子どもの貧困対策事業から みえてきたこれから必要なこと

私たちは、この12年間の活動を通し、多くの子どもたちと出会い、その出会いのなかでさまざまな「困った」に直面してきました。子どもたちや家族はその「困った」状態を「人に相談することは無駄だ」「恥ずかしくて人には言えない」「どこに相談していいかわからない」「そもそも困っている状況がわからない（この状態が普通と感じている）」といったことから前提として「つながる」ことそのものがとても難しいのです。

子どもたちの困りを皆さんと考え、悩むことが未来の子どもたちがこの地域、社会でよりよく育つためのきっかけとなってほしいとの思いで今回9つの課題をあけました。

💰 お金

現状と課題

- ・福祉サービス（生活保護や奨学金など）を利用することで支えられている家庭は多い
- ・しかし保護者のもつ病気やストレスによって経済的支援が子どもに適切に使われないこともある
- ・制度やサービスを利用できていない家庭もある（知らない、手続きが難しい）

活動では

- ・物品などで困っている場合は物品寄付を募り、子どもに直接物品を渡す
- ・制度やサービスを利用するにあたり、同行や情報提供を行なう
- ・保護者へのサポートの体制を整えるべく各機関と連携をはかり、当事業でも相談などを受けるための体制を整えていきたい

これから

- ・保護者には経済的な支援と共に精神的なサポートが必要
- ・どんな家庭でも等しく子どもが経済的支援を受けられる仕組み作り

🍴 生活

現状と課題

- ・仕事と育児、家事の両立が難しくどうしても家事育児が後回しになる、または保護者自身が適切な家庭環境の経験がない
- ・そのため日常生活においての子どもの「困り」が出てくる
- ・当事業にはこのような子どもたちを活動に参加させたいという相談がとて多い

活動では

- ・活動を通して子どもたちが、一般的な生活習慣を身につけていくことも一つの目的にある
- ・より多くの子どもたちの生活面を支えられるような設備を増やし整えていきたい

これから

- ・「お風呂」「食事」「宿題を見てもらう」など「日常を地域で支える仕組み」がどんどん増え、ボランティアな力だけでなく社会の仕組みとしてできるようになってほしい

👨‍👩‍👧 家族関係

現状と課題

- ・家族の形としてひとり親や多子家庭、ステップファミリー、多国籍、歳の離れた親子などさまざま
- ・なかには家族関係も揺らぎやすい家庭もあるが、なかなか同じような環境の人はいないため保護者が孤立しやすい

活動では

- ・子どもの活動を行う一方で、保護者の面談を別途行っている
- ・「子育て相談」ではない何気ない話や育児の口をゆったりと話しができるような機会を作りたい

これから

- ・福祉サービスの仕組みが多様な家族に対応していない
- ・保護者の子育て相談以外のゆったりした話をする機会がないため

📎 義務教育以降の支援

現状と課題

- ・高校中退や奨学金、進路や一人暮らし、就職の相談など多岐にわたる
- ・保護者を頼れない人の義務教育以降の支援は少ない
- ・そして相談窓口はあっても自ら相談に行ける人は少ない

活動では

- ・「活動の対象者」としてではなく一緒に活動する「担い手」として参加してもらいながらも、様子を見ていたりその都度相談に乗ったりしている
- ・可能であれば同行もしながら既存の制度やサービスにつなげていく

これから

- ・義務教育以降の支援は全般的に少ないため充実させる必要がある
- ・相談窓口はあるが敷居が高かったり、相談しづらかったりとなかなかつながりづらい状況があるため、相談できる人を増やしていきたい

🚶‍♂️ ルールや制限

現状と課題

- ・コロナ禍であることや近年の子どもをめぐる事件により安全面を考慮してのルールや制限が増加している
- ・公園など無料や安価で遊べる場所の減少や、ボール遊びや花火が禁止にされる

活動では

- ・最近では、有料の施設でしか遊べないことも多く費用がかさむことが課題に挙げられる
- ・外で遊ぶときは近隣住民の許可を得て、安全面に配慮することや、人がいない時間帯に公園に行くなどしている

これから

- ・今後も子どもたちが外遊びをやりたいことができるよう資金作りをしていく
- ・安全面を考慮しつつも、子どもが自由に遊べる場所や地域づくりを考えていきたい

🕒 長期的な支援

現状と課題

- ・当団体でも、細く長く子どもたちと接していくことを目指してきたなかで、長期的に関わることによって子どもたちの変化を見ることができたり、SOSサインをもらえたりすることもあった
- ・子どもたちからも「よく知っている人だから相談できた」という声もあった

活動では

- ・子どもたちと細く長くつながり、いつでも相談できる、安心できる居場所を作り続けること
- ・必要な場合は子どもに同行し、相談できる窓口まで一緒に行ったり、必要な物品を寄付募集し手渡したりする

これから

- ・いつでも信頼できる人に相談できる場所や人を、地域の方と作っていく
- ・子どもの年齢によって細切れに切れる福祉サービスに対してどのような方法があれば長く関わることをできるのか検討していきたい

📖 専門性と非専門性

現状と課題

- ・10年間子どもたちと活動をしてきたなかで、近年専門知識を要する相談が増えてきた。ボランティアも「自分ではできないのだろうか」と悩むことも増えた
- ・「ボランティア活動」を大切にしていた当団体と求められる「専門性」のギャップに悩むこともある

活動では

- ・ボランティアには専門家ではなく「お兄さんお姉さん」的な関わりが大切であることを伝える
- ・随時ボランティアの相談には乗ること
- ・現状では専門性を要することもあり、よりこの活動を支える人を増やしていきたい

これから

- ・専門知識を有する人が増員し、専門機関として子どもたちのバックアップ体制を整えられてほしい

施設と地域

現状と課題

- ・家庭の事情で途中一時的な保護施設を利用するが、その後地域で見守り体制が整わないまま、家庭に帰ってくる人が多い
- ・何度も施設と家庭を出入りすることも多く、子どもも家庭もが不安定になっていくこともある

活動では

- ・子どもたちには「どんな状況になってもいつでも戻ってきて」と伝えている
- ・子どもが保護施設入所したあとは、各専門機関と情報共有を行い、地域でより見守りを強化していくため会議などを行い連携を図る

これから

- ・現在の状況では、地域で見守りが必要な家庭と子どもに対しての人員やサービスは足りないところもあり、見守りをするための公的な支えの厚みを増してほしい

支援者

現状と課題

- ・現在は貧困対策の理解も広がり新しい施策、子ども食堂や学習支援など地域としての支援も広がってきた
- ・しかし子どもを支える人への「支え」も足りていない現状がある

活動では

- ・これからも子どもたちと活動を続けていくために「困った」を発信し続けること
- ・子どもたちに応じた活動を作るべく活動を広げていくことは必要

これから

- ・子どもを支える家庭、教育、福祉、保育、地域の担い手の数が少なかったり、役割が偏っていたりすることでうまく機能しないため「支援する人の支援」の充実を図っていくことが必要



「この報告書を読んでもくださった皆様へ」

子どもの貧困対策事業は、今年で12年目を迎えました。

皆様ひとりひとりのご理解と支えがあって、こんにちまで子どもたちとの活動を作ることができました。本当にありがとうございます。

当事業は、法人会員さんの中にいた、あるひとりの子どもとその家族の要望からできた個別サポート「学習サポートのびのび」を実施していくなかで、経済的な困りごとを抱えた家庭にも届くようにと始まりました。12年という時間をかけて活動をしてきたことで、ありがたいことに毎年たくさんのご相談が当事業のもとに届きます。そして活動を続けていくと同時に「まだまだ活動の幅を広げていきたい」と感じています。それは、周囲の支えがないためにどうしようもなく希望を失った子どもたちやその家族が多くいると感じるからです。

私たちは「この活動はそのような状況にいる子どもたちにとって、どのような意味をもつのだろう」といつも考えます。私たちの願いとして全ての子どもがもつべき当たり前があって、あたたかい人とのふれあいを通して、ゆっくり安らげる場であり、安心して自分のやりたいことに挑戦し何度も失敗して何度もやり直しができる機会がある、そんな場所であって欲しいと思います。そして子どもたちが「あの時楽しかったな」とふと思い出せて活力となったり、「意外と悪くもないんじゃないな」と思ってくれたりしてくれたりしたいと思います。

そんな活動をこれからも一緒に作っていかれたらと思います。引き続き、あたたかいご支援をよろしくお願いいたします。



特定非営利活動法人 山科醍醐こどものひろば
福崎由貴子

《子どもの課題は社会の課題》

今回の報告書を作成するにあたり、長い期間を通して子どもたちやその家族と関わりながら感じた、「皆様と共にこれから考えたいこと」を9つに絞って挙げていただきました。

「9つの課題」は「家庭がもっている課題」ではなく「社会のもっている課題」であると私たちは捉えています。子どもたちやその家族が置かれている環境は、決して本人たちの怠惰やわがままからできたものではなく、一般的に当たり前にあるはずの「機会」や「選択肢」「将来の夢や希望」「生きるための活力」などが失われたまま、毎日生活し生きていかなければならない環境です。

「9つの課題」はそんな支えの少ないサバイバルのような環境に置かれている子どもたちやその家族が、地域・社会の理解と社会的な仕組みによる支えによって「当り前の生活ができる」「自分のもつ本来の力で自分らしく生きることが出来る」ための仕組みづくりのきっかけになればと思います。

今回挙げた「9つの課題」以外にも書ききれなかったたくさんの課題があります。この活動を日々支えてくださっている皆様と共に、子どもたちとその家族が「その人らしく、楽しく生きていけるか」を一緒に考えていけたらと思います。

【子どもの貧困対策事業】寄付者募集のご案内

山科醍醐こどものひろばの「子どもの貧困問題」への活動も、みなさまのご支援もあり13年目に突入しました。いつも応援いただきありがとうございます。地域で活動していくなか、解決以前にこれまでつながることのできていなかった子どもや家庭に次から次へと出会い、活動で受け入れる人数、活動回数、活動場所がより求められ続けています。

出会った子ども・家庭の声から、はじめは一緒にご飯を食べることからはじめましたが、コロナの間も含めたこの12年間で、学校、児童相談所、福祉事務所、京都府、京都市、区役所、保育所や福祉施設、企業や事業所そして地域の皆さんのお力もあり多くの活動を生み出し、なんとか活動継続もでき、子どもたちと多くの時間を共にすることができました。一方で長く活動していくと、連携先などが活動を終了することもあり、活動場所の確保などあらたな課題が生じてきています。

現在の活動を安定的に取り組んでいくために、さらにスタッフ体制と活動場所の確保に力をいれていきたいと考えています。そのために必要な資金としては寄付募集目標を400万円とし、少しでも多くの活動を届けるために協力を募っていきたくと思っています。今年度は特に連携先であったコミュニティカフェの閉所を受け、活動会場の確保として従来のコミュニティカフェであった場所を活用させていただき、下半期で約60万円の寄付を募りその場所を確保していきたくと思っています。また、いただいたご寄付は、食費・教材費・活動会場費・サポーター交通費・事業専従スタッフ人件費に活用させていただき、活動数、活動エリア拡充、活動の質の向上を図っていきますので、今後ともご支援、ご協力のほど宜しくお願いいたします。

特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば

理事長 村井 琢哉

【子どもの貧困対策事業への寄付について】

子どもの貧困対策事業に取り組むため公益財団法人京都地域創造基金を窓口寄付者を募集しております。ホームページからのお申し込みできます。（ホームページからクレジットカード決済も可）

公益財団法人京都地域創造基金：山科醍醐こどものひろば 子どもの貧困対策事業寄付募集

<https://www.plus-social.jp/project.cgi?pjid=11>

こちらのQRコードでアクセスもできます。→



郵便振替で寄付 口座記号番号 00930-4-312262

加入者名 京都地域創造基金寄付口座

銀行で寄付 京都信用金庫 本店 口座番号:2027687

口座名義 公益財団法人京都地域創造基金

※いただいた個人情報は公益財団法人京都地域創造基金において適切に管理し、寄付の手続き等の連絡業務と当財団からのお知らせや案内以外には一切使用いたしません。なお、寄付先団体に頂いた個人情報の提供することに同意いただいている場合は寄付先団体にも提供いたします。提供先においてもいただいた個人情報を適切に管理し、寄付に関連する連絡業務と事業報告等の情報提供以外には一切使用いたしません。

寄付に関する問い合わせ先 公益財団法人京都地域創造基金

E-mail office@plus-social.jp TEL：075-257-7883

〒602-0862 京都市上京区河原町通丸太町上る出水町2 8 4 番地

子育ての環境づくりのために

1000円の寄付で活動を応援

子どもの貧困対策事業を直接応援することができます。こどもたちの「やりたい」にあわせて活動づくりができます。



毎月の寄付で暮らしを応援

ひろばでは年間300日以上の実施しています。こちらでは活動全体を応援することができます。



ウィッシュリストから応援

Amazonのウィッシュリストから、食品や物品で活動を応援することができます。



古本・書き損じはがきで応援

おうちで眠っている本5冊から無料配送で活動を応援できます。



お買い物で応援

サイトを經由して買い物することで一部が活動応援につながります。



お問い合わせ

〒607-8072
京都市山科区音羽伊勢宿町33-77

☑ kodohiro@gmail.com

☎ 075-591-0877
平日 13:00～17:00、土日祝はおやすみ

🌐 <http://www.kodohiro.com/>

